広島市安佐地区におけるバレーボール運動の発展とその教育的影響に関する総合的研究（2）

——戦後より現在までの運動の展開と，関連する教育的および社会的要因の分析を中心に——

佐々木　宏*・岸本幸次郎**・宇野　　豪**・荒井　貞光***

（受付　1998年 9 月21日）

V．戦後期における安佐地区バレーボール運動の再開と嚶鳴クラブの活躍

戦争の末期に中断を余儀なくされた「安佐郡学童排球大会」は，終戦を待ちかねたように早くも1946年（昭和21）7月10日には，名称を「安佐郡少年少女バレーボール大会」と改めて，1943年（昭和18）の第11回に続く第12回大会として再開された。戦争の影響で，物資が極めて乏しく，ほとんど物が不足していた時代であったから，大会の開始と実際の運営には大変な苦労があったようである。23校50チームが参加し，高等科男子の部と尋常科女子の部で，嚶鳴小学校が優勝している。しかし，この年以後は優勝校に嚶鳴小学校の名はあがっていない。それは頼実氏が1947年（昭和22）に嚶鳴小学校の校長になっており，以前と同様に嚶鳴小学校のチームの編成や試合の組合せにハンディーをつけ，他校とのバランスに配慮した結果である。

前述の坂井武彦氏は当時の頼実氏の考え方を次のように述べている。「嚶鳴小学校のチームは，学校の選抜チームではなく，クラス単位でチームを作り出場していた。そして6年生は中学生と，5年生は6年生と試合をしていた。そして，勝ったら頼実先生の機嫌が悪かった。生徒も指導してい

* 広島修道大学教授　** 元広島修道大学教授　*** 広島市立大学教授

る担任の教員も出場するからには勝ちたかった。しかし，頼実先生の口癖であった，他校を盛り上げ，大会のムードを壊さないためにも勝ち残るな。古市小学校と試合しても，とても勝てないという感情を持たせるなと。1年違うと体格も技術も差があり，勝つのは難しかったが，1回戦で敗退ということはなく，決勝戦か準決勝戦まで勝ち進んで負けると頼実先生は機嫌がよかった[48)]」というように，頼実氏は嚶鳴小学校以上に他校へのバレーボールの普及・振興を願っていたことが読取れるのである。

また，この年から秋季大会も開催することになり，第1回大会には22校，45チームが参加している。翌年7月第13回大会には30校52チームが，秋季大会には29校48チームが参加し，前年より参加校は増加している。この両年の大会は旧学校制度を継続した形で小学校の高等科，尋常科，および，男子，女子という編成で行われたが，1948年（昭和23）より学校が新制度に移行し始めたので，これから当分の間は，新制中学校の高学年と低学年，男子と女子の編成で行われることになったが，参加校は20～30校，30～50チームほどで，次第に増加に向っていった。

頼実氏は1947年（昭和22）から1961年5月（昭和36）まで嚶鳴小学校の校長を勤めており，この時期には戦前にも増して全校的な体制でバレーボールの指導が行われ，戦後の新しい生活を築こうとする社会の明るい展望を求める社会の気運も加わって，バレーボールは次第に盛況に向うようになっていった。

ついで，1952年（昭和27）には「小学校男子の部」が，翌年には「小学校女子の部」が復活したので，参加数は急速に増加し，嚶鳴小学校が「古市小学校」に校名を変更した1954年（昭和29）には，47校，107チームの参加を数える大規模な大会となり，さらに以後も年々増加を続けていった。

戦後の時期に古市小学校で学び，元全日本女子チーム監督，現在日立女子チームの監督をしている米田一典氏が，その頃の学校の様子を語ってい

48）ひろしまバレーボール調査研究会「坂井武彦氏インタビュー調査資料」 1995

る。「私が小学校に入学した時は校庭に20面以上もコートがあって，サッカーや野球もやりたかったけれども，とにかく昼休みも放課後もバレーボールで，これしか出来ないという状態でした。小学校４年生から大会があって，小さい頃からバレーボールをやっているから，どうしても好きになる。試合があると励みになり，競争心も出てくる。担任の先生も一生懸命に指導してくれるので，それが大きかったように記憶している。古市小学校出身の選手には身長に恵まれた人はいないので、皆セッターです。猫田さんもそうだし，つまり，小さい頃からボール遊びをしていると，ボールの扱い方が巧くなるので，相手との駆け引きも上手になる。ともかく短い休憩時間の中で早く行かないとコートが取れないから，ダッシュでコートに出て，５点か10点とっては，次の休憩時間にその続きをする，といった遊びの中から，バレーボールを楽しく覚えていったように思う[49]。」さらに，「中学校や高校でバレー部に入らなかったとしても，小学校でやっていると，ルールなどを知っているから，大人になっても，テレビでバレーボールを見ていても楽しい。親子でバレーボールの話が出来るから，共通の話題になる。私は今，指導者の立場にいるが，やはり，子供の時にやっていたことが大きいと思う。小さい時に身についたものは，自分の身体で覚えているから何時までも消失しない。子供が小さいと，それだけ指導者にいい人が必要だと思う[50]。」

「安佐郡少年少女バレーボール大会」の1946年（昭和21）から1973年（昭和48）までの春季大会と秋季大会の記録を記載しておく。

「安佐郡少年少女バレーボール春季大会」第12回より第39回までの概略

回	年度	開催日	参加校・チーム数	優　勝　校	備　　考
12	1946 昭和 21	7月10日	23校　50チーム	高等科男子　嚶鳴小学校 高等科女子　大下学園 尋常科男子　祇園小学校 尋常科女子　嚶鳴小学校	大戦の終了を待ちわびていたかの如く再び大会が開催された。大会名を「安佐郡少年少女バレーボール大会」と変更

49）ひろしまバレーボール調査研究会「米田一典氏インタビュー調査資料」 1996
50）同上

回	年度	開催日	参加校・チーム数	優　勝　校	備　　考
13	1947 昭和 22	7月10日	30校　52チーム	高等科男子 伴　小学校 高等科女子 可部小学校 尋常科男子 原　小学校 尋常科女子 大林小学校	
14	1948 昭和 23	7月20日	21校　30チーム	中高学年男 古市小学校 中高学年女 伴　中学校 中低学年男 高宮中学校 中低学年女 大下学園	今大会より小学校の部と中学低学年，男，女を振替える
15	1949 昭和 24	7月17日	25校　36チーム	中高学年男 祇園中学校 中高学年女 大下学園 中低学年男 伴　中学校 中低学年女 古市小学校	この大会も規模が拡大し「県下少年少女バレーボール大会」と名称変更。遠く鹿川方面からも参加あり
16	1950 昭和 25	7月13日	34校　49チーム	中高学年男 崇徳中学校 中高学年女 広島女学院 中低学年男 高宮中学校 中低学年女 古市小学校	
17	1951 昭和 26	7月12日	35校　48チーム	中高学年男 祇園中学校 中高学年女 広島女学院 中低学年男 安佐中学校 中低学年女 安田中学校	
18	1952 昭和 27	7月13日	40校　58チーム	中高学年男 祇園中学校 中高学年女 宇品中学校 中低学年男 安佐中学校 中低学年女 広島女学院	「小学校男子の部」を復活させる
19	1953 昭和 28	7月12日	43校　77チーム	中高学年男 祇園中学校 中高学年女 宇品中学校 中低学年男 安佐中学校 中低学年女 幟町中学校	「小学校女子の部」を復活させる
20	1954 昭和 29	7月11日	47校　107チーム	中高学年男 鹿川中学校 中高学年女 幟町中学校 中低学年男 安佐中学校 中低学年女 戸山中学校 小学校男子 原　小学校 小学校女子 戸山小学校	参加チーム数が100を越える大規模な大会となる。「嚶鳴小学校」の名称を「古市小学校」と校名変更する
21	1955 昭和 30	7月10日	48校　109チーム	中高学年男 宇品中学校 中高学年女 幟町中学校 中低学年男 古市小学校 中低学年女 戸山中学校 小学校男子 祇園小学校 小学校女子 戸山小学校	
22	1956 昭和 31	7月8日	50校　109チーム	中高学年男 祇園中学校 中高学年女 翠町中学校 中低学年男 古市小学校 中低学年女 戸山中学校 小学校男子 祇園小学校 小学校女子 伴　小学校	参加校が50校を越える
23	1957 昭和 32	7月14日	46校　120チーム	中高学年男 明徳中学校 中高学年女 翠町中学校 中低学年男 古市小学校 中低学年女 伴　中学校 小学校男子 祇園小学校 小学校女子 山本小学校	

回	年度	開催日	参加校・チーム数	優　勝　校	備　　考
24	1958 昭和 33	7月6日	51校　136チーム	記　録　不　明	この大会より少年少女バレーボール大会を「バレーボール祭」と大会名を変更する。真に県内の少年少女の祭典として名実ともに充実させた
25	1959 昭和 34	7月5日	59校　141チーム	中高学年男　高宮中学校 中高学年女　幟町中学校 中低学年男　安佐中学校 中低学年女　古市小学校 小学校男子　安　小学校 小学校女子　安　小学校	
26	1960 昭和 35	7月3日	59校　150チーム	中高学年男　崇徳中学校 中高学年女　段原中学校 中低学年男　安佐中学校 中低学年女　祇園中学校 小学男子A　緑井小学校 小学女子A　大須小学校 小学男子B　小河内小学校 小学女子B　小須小学校	今大会より小学校男，女にそれぞれAクラス，Bクラスを設ける
27	1961 昭和 36	7月3日	68校　140チーム	中高学年男　阿賀中学校 中高学年女　幟町中学校 中低学年男　崇徳中学校 中低学年女　古市小学校 小学男子A　緑井小学校 小学女子A　古市小学校 小学男子B　飯室小学校 小学女子B　小河内小学校	
28	1962 昭和 37	7月1日	64校　161チーム	中高学年男　崇徳中学校 中高学年女　広中央中学校 中低学年男　古市小学校 中低学年女　古市小学校 小学男子A　原　小学校 小学女子A　安　小学校 小学男子B　落合小学校 小学女子B　落合小学校	
29	1963 昭和 38	7月7日	60校　161チーム	中高学年男　修道中学校 中高学年女　江波中学校 中低学年男　安佐中学校 中低学年女　新和小学校 小学男子A　原　小学校 小学女子A　伴　小学校 小学男子B　久地小学校 小学女子B　日浦小学校	古市小学校が大須小学校と合併し「新和小学校」と校名を変更する
30	1964 昭和 39	6月28日	73校　164チーム	中高学年男　明徳中学校 中高学年女　千代田中学校 中低学年男　新和小学校 中低学年女　安田中学校 小学男子A　原　小学校 小学女子A　祇園小学校 小学男子B　口田小学校 小学女子B　日浦小学校	参加校が70校を越える。「30周年記念大会」と銘打って開催し，参加チームへはペナント，大会運営上の功労者には感謝状と副賞を贈る

回	年度	開催日	参加校・チーム数	優　勝　校	備　　考
31	1965 昭和 40	7月11日	72校　159チーム	中学校男子 祇園中学校 中学校女子 安田中学校 小学男子A 緑井小学校 小学女子A 新和小学校 小学男子B 新和小学校 小学女子B 久地小学校 小学男子C 狩小川小学校	「中学校低学年」の部を廃止し小学校男女を各A.B.Cクラスに分けた。この年より新和小チームも相当学年に出場することになった
32	1966 昭和 41	6月19日	64校　140チーム	中学校男子 明徳中学校 中学校女子 大朝中学校 小学男子A 新和小学校 小学女子A 新和小学校 小学男子B 口田小学校 小学女子B 天満小学校 小学男子C 川内小学校 小学女子C 日浦小学校	広島市内より小学校1校が参加する（天満小学校）
33	1967 昭和 42	6月18日	70校　172チーム	中学校男子 大手町中学校 中学校女子 福富中学校 小学男子A 長東小学校A 小学女子A 長東小学校A 小学男子B 鈴張小学校 小学女子B 狩小川小学校 小学男子C 深川小学校 小学女子C 日浦小学校	広島市内より小学校が参加する。中学校の試合は安佐中学校に会場を移す
34	1968 昭和 43	6月23日	83校　223チーム	中学校男子 祇園中学校 中学校女子 警固屋中学校 小学男子A 長東小学校A 小学女子A 新和小学校A 小学男子B 新和小学校A 小学女子B 安　小学校 小学男子C 新和小学校 小学女子C 日浦小学校	参加校80校，参加チーム200チームを越える。広島市内より小学校3校が参加する
35	1969 昭和 44	6月16日	80校　212チーム	小学男子Aゾーン （松）中和A　（竹）口田 （梅）久地 小学女子Aゾーン （松）長東A　（竹）天満 （梅）戸山 小学男子Bゾーン （松）新和A　（竹）内中 小学女子Bゾーン （松）山本A　（竹）長東 小学男子Cゾーン 安　小学校 小学女子Cゾーン 日浦小学校	この大会から社会体育に衣がえし，入賞者を増やすなどして開催された
36	1970 昭和 45	6月28日	39校　148チーム	小学男子Aゾーン （松）新和A　（竹）深川 （梅）飯室 小学女子Aゾーン （松）長東A　（竹）伴 （梅）飯室 小学男子Bゾーン （松）長東A　（竹）伴	昨年の県教組の抗議の影響で参加校，参加チームが半減する

回	年度	開催日	参加校・チーム数	優　勝　校	備　　考
				小学女子Bゾーン （松）幟町（竹）日浦 小学男子Cゾーン 小河内 小学女子Cゾーン 日浦	
37	1971 昭和 46	6月20日	42校　158チーム	小学男子Aゾーン （松）新和A（竹）伴A （梅）深川 小学女子Aゾーン （松）幟町　（竹）似島 （梅）狩小川 小学男子Bゾーン （松）長束A（竹）緑井B 小学女子Bゾーン （松）新和　（竹）口田A 小学男子Cゾーン （松）日浦東A（竹）新和 小学女子Cゾーン 新和	
38	1972 昭和 47	6月18日	42校　158チーム	A組男子　（松）長束A （竹）伴A（梅）落合 A組女子　（松）口田A （竹）川内A（梅）小河内 B組男子　（松）新和A （竹）大町A（梅）三入 B組女子　（松）長束A （竹）大町A（梅）日浦東 C組男子　新和A C組女子　川内	この年の4月大町小学校は新和小学校から分離する
39	1973 昭和 48	6月17日	42校　160チーム	A組男子　（松）新和 （竹）八木A（梅）狩小川 A組女子　（松）長束B （竹）川内　（梅）可部 B組男子　（松）新和A （竹）三入　（梅）飯室 B組女子　（松）似島 （竹）川内B（梅）飯室 C組男子　（松）新和A C組女子 （竹）似島A（梅）日浦東	市町村合併により第39回大会で終わり，新たに「広島市少年少女バレーボール祭」としてスタートする

「安佐郡少年少女バレーボール秋季大会」第1回より第28回までの概略

回	年度	参加校・チーム数	備　　考	回	年度	参加校・チーム数	備　　考
1	1946 (昭21)	22校　45チーム	秋季大会が始まる	4	1949 (昭24)	26校　39チーム	
2	1947 (昭22)	29校　48チーム		5	1950 (昭25)	35校　55チーム	
3	1948 (昭23)	28校　35チーム		6	1951 (昭26)	36校　50チーム	

回	年度	参加校・チーム数	備　　考	回	年度	参加校・チーム数	備　　考
7	1952 (昭27)	40校　60チーム		18	1963 (昭38)	58校 160チーム	
8	1953 (昭28)	45校　79チーム	古市小学校と変更	19	1964 (昭39)	59校 165チーム	
9	1954 (昭29)	47校 109チーム		20	1965 (昭40)	51校 170チーム	
10	1955 (昭30)	48校 110チーム		21	1966 (昭41)	60校 154チーム	
11	1956 (昭31)	50校 121チーム		22	1967 (昭42)	30校 146チーム	中学校の大会不参加
12	1957 (昭32)	47校 119チーム		23	1968 (昭43)	70校 151チーム	
13	1958 (昭33)	47校 120チーム	「バレーボール祭」に名称変更	24	1969 (昭44)	80校 167チーム	
14	1959 (昭34)	53校 136チーム		25	1970 (昭45)	32校 180チーム	
15	1960 (昭35)	61校 155チーム		26	1971 (昭46)	34校 199チーム	
16	1961 (昭36)	69校 151チーム		27	1972 (昭47)	34校 112チーム	
17	1962 (昭37)	55校 152チーム		28	1973 (昭48)	39校 166チーム	広島市と合併

戦後の安佐地区のバレーボールを語る上で，どうしても見逃すことのできない大きな業績が，嚶鳴小学校の卒業生でつくった「嚶鳴クラブ」である。全日本選手権大会と国民体育大会に4連覇を成すという快挙を果たしたが，チームが誕生するまでの，広島のバレーボール運動の状況や，「嚶鳴クラブ」の活躍の様子を見ておくことにしよう。

戦争末期に中断を余儀なくされた広島のバレーボールは，1946年（昭和21）に一斉に再開して立上がるのである。広島県バレーボール協会は戦前の協会役員の中島太郎，頼実力，河野実一，永井猛敏，長岡浩造，名黒英美らの努力により組織を再建した。県内にも戦前よりバレーボールに親しんだ愛好家や活躍した人たちでつくった同好会，クラブ，青年団チームが結成され活躍した。代表的なチームは芸陽クラブ，広島同好会，嚶鳴クラブ，呉同好会，海田つくもクラブなどである[51)]。戦後の打ちひしがれた楽し

51)　広島県バレーボール協会広報委員会「ひろしまバレーボール50年のあゆみ」 昭和52年12月（1977）P 71

みや娯楽のない時代に，青少年の不良化防止の意味をかねて，多くの地域で町をあげてバレーボールに取り組む姿が見られた。同年４月には呉市で県大会，６月には安佐郡体育協会の主催で広島県排球選手権大会が嚶鳴国民学校を会場として行われ，男女とも古市青年チームが優勝ししている[52,53]。そのあとで両チームとも「嚶鳴クラブ」と改称した。

彼らも戦争で親を失ったり，敗戦後の困窮した生活のなかで，ゆとりのある者は一人もいなかった。彼らは何を心にもって生きていこうか，ということを集っては話合った。その時，自分たちには「そうだ，バレーボールがある」ということに気がついた。働いている場所も時間も違うので，集るのは夜しかなかった[54]。

女子の「嚶鳴クラブ」も県の大会で優勝したり，1947年（昭和22）には男子より先に全日本選手権大会に出場して準決勝まで進み，その名をあげている。しかし，選手の結婚などにより，1949年（昭和24）には解散したので，その活躍はほとんど知られていない。これに対して男子チームは，その後練習を重ねて益々腕を磨いていった。

当時，青年団活動の一つとして始めた「嚶鳴クラブ」の状況を監督の沖道夫氏は，「母校の校庭でバレーボールを始めるキッカケは，娯楽も何もない，皆共通に知っていることはバレーボールだと，集ってみたらボールがあるではないか、やろうじゃーないかということになった。しかし，親が原爆や戦争で亡くなり，選手９人のうち８人は片親であった。だから高等小学校を卒業すると，すぐに一家の大黒柱として働きに出なければいけない境遇の者ばかりであった。職業も魚屋，屋根屋，国鉄勤務，小さい会社のサラリーマン，地元の企業のサラリーマン，学生，家業の豆腐屋の手伝いなどであった。勤務先の違いから集る時間はいつも夕方からであった。誰

52）金桝晴海「広島スポーツ100年」中国新聞社　昭和54年９月　（1979）

53）広島県バレーボール協会広報委員会「ひろしまバレーボール50年のあゆみ」昭和52年12月（1977）Ｐ71

54）中国新聞特集「安佐のバレーボール（3）」昭和56年２月25日　（1981）　Ｐ7

もバレーボールが好きだった。その中から上手な者を集めたが，生活が苦しいために参加できない者も多かった。練習はスパルタ式で，暗くなるまでやった。平均年齢21歳，平均身長 166 cm で，力ではとても対抗できなかった。サーブで相手を崩し，速攻を織込んだ時間差攻撃で，テンポの速いバレー，全員攻撃のできるチームを目指した。町の人達が夜遅くまでボール拾いなどして練習を手伝ってくれた。頼実校長は闘志，山木後援会長はチームの和を強調した[55]。」

当時は，どこのチームにも「大砲」が一人か二人いて，そこにトスを集中する三段戦法という単純なバレーボールであった。テンポが速く，前衛中衛どこからでも打ってくる嚶鳴クラブのバレーは異色であった。多彩なサーブも相手チームをてこずらせた。当時，慶応大学 3 年生でバックセンターであった松平康隆氏（ミュンヘン・オリンピック男子監督，元日本バレーボール協会会長）は，「嚶鳴クラブは強いチームでしたから初めて対戦し初めて負けた。ドライブサーブの凄いのを打つチームで私のバレーに対しての一つの歴史のスタートであった。特にダブルファーストという一本目も二本目も思い切りサーブを打つというものだったが私は当時，サーブアンドラッシュという表現をしたんですが，サーブこそ先手必勝だという，バレーボールの戦術の 1 ページを作った」と嚶鳴クラブのサーブの評価をしている[56]。

元帝人三原の選手，監督で，全日本選手としてもアジア大会など各種国際大会に出場した小泉忠直氏は，「私が帝人三原から初めて全国大会に出場したのが，1949年（昭和24）の鶴岡の実業団選手権大会であった。嚶鳴クラブ打倒ということで，帝人も先輩の岩田さんらと相談して，強化策を練ろうとやった。1948，1949年（昭和23，24）が嚶鳴クラブの全盛期であり，1951年（昭和26）頃からチームの選手が他の企業に引抜かれていった。しかし，1952年（昭和27）には残留組は残って，三原で行われた全日本総合

55)　ひろしまバレーボール調査研究会「沖道夫氏インタビュー調査資料」 1995
56)　同「松平康隆氏インタビュー調査資料」 1977

の県予選では嚶鳴クラブを倒した。記憶に残っているが，9対12で負けていた時，自分のサーブで連続12点とって21対12で勝った。チーム全員で打倒嚶鳴ということで猛練習を積んできたのだし，いくら下降線をたどっているといっても嬉しかった。私の嚶鳴クラブの印象はスタープレーヤーはいなかった。そして身長もそんなにない，だから脚力，応用，判断力，プレーの技術面は素晴らしいものを持っていた。それと，サーブは9人が9人とも得点能力がある。特にファーストサーブよりもセカンドサーブに脅威を感じた。これは嚶鳴クラブ独得のサーブであった。それと，ブロックは大したことはないがレシーブは天下一品であった。西田選手を中心にしてレシーブの幅が非常に広かった。それと合わせて2段トスが素晴らしかった[57]。」と回想する。

嚶鳴クラブが初めて優勝した時，高等小学校卒業の片田舎の青年団チームが，東京の大学チームを破ったとして，全国を驚かした。全国から強いチームが試合をして欲しいと広島を訪れるようにもなり，また，報道関係者も取材に訪れている。NHKの鈴木文弥，土門正夫アナウンサーもラジオ実況放送の練習のために再々訪れている。1948年8月（昭和23）の中国新聞「排球の町・古市訪問記」には次のように記されている。「照りつける8月の太陽のもと，コートを飛びまわる白いボールと選手，ネットの反対に，相手のストップ代りに机の上で両手を伸している数人の村人の姿，いまや日本バレーボール界の頂点にたつ嚶鳴クラブを育てた古市の町の表情である。28，29両日の全日本制覇をめざして嚶鳴は猛練習中である。コートの周りにはボール拾いの子供たちが群をなし，同チームが得意とするフェイント，リバウンドの練習に町の人たちが積極的にストップ代用をかって出ている。終戦後，かつての広島藩校嚶鳴の名をとったクラブが中国地方の諸強を破って，こつ然と全日本の檜舞台に現われたとき，人々は嚶鳴とはどこのチームかと驚き，それが広島の田舎の青年団のチームと聞いて驚き，

57）ひろしまバレーボール調査研究会「小泉忠直氏インタビュー調査資料」1996

全町あげてバレーボール熱にまた驚いた。戦後の農村に体育文化をとりあげたのは頼実力氏だった。チームを鍛えたのは河野，沖両監督であり，さらにこの集団を力強くカバーしたのは山木古市体育協会会長を始めとするファンの熱誠だった。選手は平均22歳，堀尾主将の25歳を筆頭に19歳が 2 人，レギュラー 9 人のうち 8 人までが片親で，家計を負担している。練習開始は勤務が終わってからの午後 6 時というありさまである。数年前，旧広島二中主催の県下学童大会に優勝した若芽は戦争の風雪にも耐えて，すくすくと育った。時にはストップ代役をかってでるという75歳のファンは孫のような選手たちに“必ず勝てよ”と激励している。町民の期待を一身に集めた嚶鳴の練習には気迫と自信が満ちていた[58]。」と記しているが，戦争で荒んだ町民の心を一つにし，選手を盛り上げ，チームを応援したのは，皆が小学校時代に自分たちも親しんだ同じバレーボールであったからだと思われる。

こうして嚶鳴クラブは1947年（昭和22）に全日本総合選手権大会でベスト 4 入り，1948年（昭和23）と1949年（昭和24）には連続して優勝し，全国にその名を轟かせた。両年度とも，全日本選手権大会と国民体育大会の両方で優勝したので，合計 4 連覇を成し遂げたのであった。沖道夫監督は，「戦後あらゆるスポーツを通じて広島県代表が全国優勝し県民を湧かせたのは嚶鳴クラブが最初でした[59]。」という。当時，中国新聞社が中国スポーツ新聞を発行していた記事の中に，「広島の片田舎から中央舞台に突如として彗星の如く現われ並みいる強豪をナデ切りにして覇権を奪取した[60]」と記している。また，朝日，毎日，各スポーツ新聞も，「名もなくスタープレーヤーもいない片田舎のユニークなチームがバレーボール界のビッグタイトルを奪取把握して王座に君臨したことは奇異で驚きだ[61]」というような意味

58）中国新聞特集「排球の町・古市町訪問記」昭和23年 8 月（1948）
59）ひろしまバレーボール調査研究会「沖道夫氏インタビュー調査資料」 1995
60）中国スポーツ新聞「スポーツの記事」昭和23年 8 月（1948）
61）朝日新聞，毎日新聞「スポーツの記事」昭和23年 8 月（1948）

の記事を載せていた。ちなみにその年の広島県10大ニュースの一つに数えられ，日本スポーツ10大ニュースの一つにも数えられた。

全国制覇当時のメンバーは次の通りである。

監　督		沖　道夫
助監督		河野正己
マネージャー		沖　　勉
主　将		堀尾　尊
選　手	前衛	堀尾　尊，沖本暢男，古川　稔，種清文恔，小森　勇，中川実雄
	中衛	国本　孝，西田一行，西本昭明，猫本忠三，福本敏晴，杉山敏雄
	後衛	沖　富夫，西村正人，堀尾敏明，波多野博信，猫本千秋，二五田公俊
顧　問		本多光正，藤田正水，大塚栄三
後援会会長		山木　明
幹　事		谷本徳蔵，木下百合松，植木朝登
相談役		頼実　力

当時，戦前から引継いでバレーボール界は三段戦法が戦術技術面での主流であり，強豪アタッカーを育成するチームがほとんどの時，嚶鳴クラブは大型選手に恵まれず，むしろ小兵ぞろいで，従ってオールラウンド攻撃のチームに仕上げて対抗せざるを得なかった。三段戦法の場合はアタッカーが２～３人で，どこから攻撃してくるか大体分かるが，嚶鳴クラブのオールラウンド攻撃は前衛，中衛６人全員，ときとして後衛の両サイドの２人も攻撃に加わり，どこから攻めてくるか分からぬという形であった。他のチームを大砲１～３門とするならば，嚶鳴クラブは速射砲を最低６門でもって攻めていく戦法である。また，その速射砲を生かすためには，その攻撃の前提としてサーブの強化が必要であり，チャンスボールが自チームに返ってくる形を作ってゆかねばならなかった。他チームがサーブを重視せず，簡単な練習で済ませていたものを，嚶鳴クラブはサーブを技術，作戦を通じ最重要課題として取り組まねばならなかった。従ってその練習方法とサーブの球道の種類の開発については真剣そのものであったようだ。

当時，日本の男子バレーボール界では，「三段戦法かフェイント戦法

か？」の是非論が盛んに論議されていたが，小学校の同窓生で固めた広島県安佐郡古市町の一青年団チーム・嚶鳴クラブが出現して，全日本総合選手権；国体の二つのタイトルを獲得するに及んで争点はさらに鮮明化した。特定のスタープレーヤーを持たず，9人の総合力を基本戦力とし，かつ全員ムラなく得点力の高いサーブを持っているこのチームの出現は，かつてないタイプのチームとして驚異と威嘆をもって迎えられ，バレーボール界はこのチーム自体を格好の研究テーマとして受け止めたのである。

なお，1948年度（昭和23）全日本総合選手権大会優秀選手として嚶鳴クラブより前衛　堀尾　尊，中衛　国本　孝，後衛　沖　富夫の3名が選ばれている[62)]。

さらに，このチームは技術以前の問題としてスポーツマンの必須条項は，各人が規則遵守，チームワーク，闘志，健康，鍛練などの基礎的条件を常日頃から心し，コーチは技術開発，チームコンディションの調整が当然課せられるし，監督はその他に管理能力の手腕，現場での状況判断の適正と決断の妙を発揮しなければいけないなどを信条としていた。

さらに，山木　明氏を中心として当時の後援会には，戦後の過渡期に物心両面にわたって随分と世話になったようである。戦後の広島は原爆の爪跡が生々しい焼野原，衣食住は勿論のこと娯楽もレジャーもない、仕事すらない者が多い時代に，若者達が茫然自失はまだしも心の荒んでゆく時に，山木　明氏を中心に若者の精神面での健全化への誘導がバレーボールチーム結成の基盤となった。主将であった堀尾　尊氏は，「当時の古市町民が嚶鳴クラブへのバックアップにも繋がって戦後うつろに眠っていた町民の目を覚ました一因になったと思っている。そして県代表としての戦績は県下の青少年にやれば出来るという夢と希望を与え，好影響をもたらしたと思う。」と述べている[63)]。

---

62)　日本バレーボール協会五十年史「バレーボールの普及と発展の歩み」昭和57年7月（1982）P 211

63)　ひろしまバレーボール調査研究会「堀尾尊氏インタビュー調査資料」 1997

そのようにして，1948年（昭和23），1949年（昭和24）と全盛期であった嚶鳴クラブも，1950年（昭和25）の全日本総合男子選手権大会は京都一中クラブと決勝で対戦しフルセットの末，惜敗した。この試合，20対12と離された嚶鳴クラブは中衛中の西田のサーブで20対19まで迫り，続くサーブも入って京都はチャンスボールを返した。このボールを前衛中・沖本がジャンプトスで中衛左西本へ――これで決まったと思った瞬間，なんと西本はあまりにも中へ入り込み過ぎてボールは頭越しに流れてゲームセット，三連覇の夢は消えてしまった。国体では2回戦で日本鋼管に敗れた。この頃から実業団がチーム強化に乗り出した。古川，沖本は岩国の東洋紡績，堀尾兄弟は倉敷レーヨン，西田，国本は住友金属小倉に引抜かれた。

この現象は嚶鳴クラブに限ったことではなく，強豪クラブチームは1950年（昭和25），1951年（昭和26）をピークに次々と姿を消していく。その原因はクラブの運営費の調達が困難という経済的問題と，選手各人が異なった職場に勤務しているため練習の時間的な問題と，職場の理解を得るのが難しくなったことなどであろう。そのようにクラブチームの弱さを暴露して，嚶鳴のチームは解散に追込まれたのである。

しかし，地元の青年チームによる全国制覇の偉業は，地域の人々や，学校の教職員や，児童生徒たちに大きな刺激を与え，学校だけでなく町をあげてバレーボールが盛んになり，戦前からの歴史の上にさらに拍車がかかり，少年少女バレーボール大会のほかに，地域の両親たちや，一般の住民による各種の大会が，地域の対抗試合の形で多くの団体の参加をもって行われ，地域の歴史や風土や伝統を形成するようになったのである。

Ⅵ. 安佐のバレーボール運動の普及・発展に貢献した3つの大会

安佐郡のバレーボールの盛り上がりの機運を，さらに地域の活動として拡大していったのが祇園町の県下市町村対抗バレーボール大会，佐東町のPTA学区対抗バレーボール大会，それに古市町の少年少女バレーボール大会であった。この3つの大会はそれぞれに機能し合って，安佐バレーボー

ルの裾野をぐんと広げ，普及・発展に貢献したといえよう。

1）広島市 PTA 学区対抗バレーボール大会

「この大会も頼実力氏のアイディアだった。子供のバレーボールを盛んにするには母親の理解が大事と考えた[64]」と，第一回から大会委員長を務めていた元安佐南区体育協会会長の大蔵暁氏はいう。1960年（昭和35）に始まり，1979年（昭和54）までは「安佐地区 PTA バレーボール大会」と称していたが，その後，「広島市学区対抗バレーボール大会」に改称した。俗に「ダンサン・ジョロク」と呼ばれており[65]，男性 3 人と女性 6 人で編成して 9 人制の PTA バレーボールの試合をする。毎年 9 月に安佐南区佐東町の城南中学校で開催され，全国的にみても非常にユニークな大会である。この大会には「男性はネット下より 3 m の所に引かれたアタックラインから前で攻撃してはならない。サーブは全てアンダーハンドでなければならない」という特別ルールがあるが，ここに参加する人は殆ど小学校時代よりバレーボールを経験しており，少年少女バレーボール大会に出場した父母も多い。バレーボールが旧安佐郡の各町で「町技」として水脈を保ってきた現われであろう。地域にバレーボールが取持つ縁があり，人脈が人間関係の風通しをよくしているのかもしれない。

長年世話役として大会運営に努力した佐東町の元バレーボール部長の谷本早人氏は，「男女混成で父母の親交を図り，仲間づくりを進めるのに最適な方法である。親がバレーボールをやれば子供も関心を持ち，普及に繋がる[66]」とミックス方式を賞讃する。これも当初は各地区の理解が得られず，頼実力校長が大会の趣旨を説き，安佐郡内の各校に出場を求めるなど，大変な熱意の入れ方で定着したという。

64）ひろしまバレーボール調査研究会「大蔵暁氏インタビュー調査資料」 1995
65）中国新聞特集「安佐のバレーボール（4）」昭和56年 2 月26日（1981） P 7
66）ひろしまバレーボール調査研究会「谷本早人氏インタビュー調査資料」 1995

2） 県下市町村対抗バレーボール大会

この大会も県バレーボール協会や県体育協会では考えられないユニークな大会であった。この大会が誕生したのは1954年（昭和29）であるが，終戦後特に若い人たちにとって娯楽のない時期に，戦前から盛んであったバレーボールを町起こしに利用しようではないかというところからスタートした。その辺の事情を大会役員として長年にわたり貢献した土井幸一氏に聞いた。「勿論最初から町も全面的に賛成してくれたわけではない。当時，祇園町体育協会の会長であった大下さん（フマキラー株式会社の二代目社長）の尽力と学校の先生方が非常に協力してくれたお陰である。当時の町議会の議長も最終的には呼んで，考え方や運営方法なども話し，バレーボールどころではあるし，他所でやっていないことをやろうと意見が一致して始った。当時の祇園町体育協会が祇園，原，山本，長束の４つの旧町にあり，それぞれ体協があって，バレーボール部の部長を理事にして運営していた。昔バレーボールを経験した人だけでなく，いろんな人の協力があった。ポールの穴を掘ってくれたり，まさ土を均してくれたり，現在の大会運営以上の苦労があった。主催が祇園町体育協会，主管が広島県バレーボール協会，後援は中国新聞社，ラジオ中国（現在のRCC），NHK，協賛が森永製菓，キリンビールであった。県教育委員会にも入ってもらい県知事杯のカップも寄贈された。大会に参加した選手が出来るだけ長い時間楽しめて，そして内容のある大会にしたいということと，広島県バレーボール協会の役員を総動員していたので，それ相当の審判，競技運営をし権威があり魅力ある大会であることを認識してもらうことにより，参加者，チームを集めることに知恵を絞り，努力した。そして強いチームをピックアップしてはまずいと分散させようということで，最終的にはA, B, C, D, Eクラスを設定した。広島地区以外から参加したチームは普及という意味もあり，また，初めて出場するようなチームは全てEクラスとした。Aクラスは最強チームのグループで最後に試合をする。Bクラス以下は負ければ１クラス落ちてトーナメントに入るというシステムで出来るだけ数多く試合をしてもらうようにした。多くても４～５試

合する，そしてこれだけの会場で優勝し，しかもラジオで放送もしてもらえるというので，珍しさ，楽しもうというのでバレーボール祭のような雰囲気であった[67]。」

祇園町教育委員会に勤務し，第一回より役員として活躍した茶川吉昭氏は，「私は町の教育委員会にいたので大会が始まる1週間前から準備で，ポスター張りから大変であった。バタンコ（自動三輪車）で尾道，三次，岩国，福山，三原までポスターを張りに行った。用具を広島市中央コート，祇園町内の小学校，中学校，古市小学校へ借り歩いた。コートを20面設営したので，ポール，審判台，得点板が20セット必要であった。大会前日までに借りて集めなければならなかった[68]。」と当時の苦労を話す。

しかし，残念ながらこの大会は第20回で廃止になった。その原因は「広島市に合併すると大会の予算が付かない」ということで，祇園町体育協会の理事会で中止せざるを得ないということになった。その他にも，「昔は手弁当で，ボランティアで協力していたが，今は旅費，弁当代，日当を用意しないと役員を頼めないようになった」と嘆かれるようになったり，さら

大会開催日と参加チーム数

回	参加チーム数	開催日	回	参加チーム数	開催日
1	37	1954. 5. 9（昭29）	11	64	1964. 5.17（昭39）
2		1955.	12	70	1965. 4.18（昭40）
3	30	1956. 5. 6（昭31）	13	73	1966. 4.17（昭41）
4	42	1957. 5.12（昭32）	14	93	1967. 4.23（昭42）
5	47	1958. 4.20（昭33）	15	86	1968. 4.21（昭43）
6	53	1959. 4.19（昭34）	16	72	1969. 6.15（昭44）
7	56	1960. 4.24（昭35）	17	64	1970. 4.26（昭45）
8	60	1961. 4.23（昭38）	18	78	1971. 4.25（昭46）
9	63	1962. 4.22（昭37）	19	73	1972. 4.23（昭47）
10	59	1963. 4.28（昭38）	20	80	1973. 4.22（昭48）

67）ひろしまバレーボール調査研究会「土井幸一氏インタビュー調査資料」1996

68）同「茶川吉昭氏インタビュー調査資料」1997

に，6人制の普及により，「バレーボールは体育館で行うスポーツ」というイメージが強くなったなどの社会情勢の変化と参加する選手の意識が大きく変ってきた[69]。そのため，それぞれの地域にあの当時帰っていた人達を集めてチームを作るのが困難になったなどが中止の原因として考えられる。

このような地域の大会は，若い青年や親たちの親交を図り，地域の人々の仲間づくりを促進し，地域の住民が共通の楽しみをもつのに役立つと考えて，安佐地区の地域活動として，この2つの大会は作られた。それによって，小学校時代からバレーボールに親しんできた仲間たちが，喜んで参加しただけでなく，戦後の地域の合併などで新しく構成された住民たちの仲間づくりの機会としても，非常に楽しく有益な事業として喜ばれ，地域の連帯を育て，町の伝統をさらに培う力となっていったのである。

安佐バレーボールは別称「可部線バレー」ともいう。すなわち，JR可部線沿いの旧町，つまり祇園町，安古市町，佐東町，可部町を指すのであるが，この地域の住民は昔から「きずな」が強かったと言われる。広島市バレーボール協会会長の西山時義氏は，「安佐郡は太田川を中心に地域住民の生活導線があり，その流れのなかで魚を捕って遊んだり，バレーボールをしたり，スポーツをする仲間意識から，いろんな意味で住民の交流というものができた。旧安佐郡はバレーボール以外のバドミントンやテニスなども盛んであるが，バレーボールなら即座にできる。例えば，小学校のPTAバレーボールでも一つの学校の中で学年対抗の試合をするということになっても，チームも試合運営もすぐ可能。3つの大会を中心にそれぞれの地域が活性化されたし，行政マンも，議員の先生もそれに熱中するので，いろんな面で拍車がかかって盛んになった。それには猫田選手のようなオリンピック選手も，優秀な指導者も，世界的な審判員も多数でている。安佐郡バレーボールの特徴は，バレーボール人口も数多い，密度も高い，皆が主役であり，皆が選手である。〈あの人に頼って，あの人の力で勝とう〉とい

69）広島市安佐郡祇園町「祇園町誌」昭和45年12月（1970）P331−P332

う形のバレーボールは安佐郡のバレーボールではなかった。安佐郡バレーボールは皆がバレー上手だ，皆セッターであり，皆レシーバーであり，皆アタッカーである。そういう形で鍛え上げられてきたバレーボールである[70]。」と分析する。

このように，昭和の初めに地域の子供たちの，放課後の生活の世話と指導をとりあえずの課題として取り組んできた古市小学校から始まったバレーボール運動は，青少年の健全育成に貢献しただけでなく，地域全体の人々を結び，地域の人々の楽しみでもあり，誇りでもあるような地域の生活文化として，また，地域の人々の心を育てる伝統的な地域行事としても，地域生活に欠かせないものにまでなってきたと言ってよいであろう。

3）少年少女バレーボール大会

1933年（昭和８）以来，戦争のために1944年（昭和19），1945（昭和20）の２年間中止せざるを得なかったが，年々盛大になってきた。1954年（昭和29）には，参加チーム数が100を越えるまでになり，1958年（昭和33）に名称を「少年少女バレーボール祭」と変えて，広く県内のバレーボール大会として，規模，内容ともに，充実した大会に成長した。参加の状況を見ると，中学校の部には全県から，小学校の部には安佐郡の学校が参加していた。1960年（昭和35）には，出場チーム数の増加にともなって，小学校男子および女子の部にＡクラスとＢクラスを設けている。この年の参加校は約60校，150チームを数えており，さらにその後も増加する傾向を示していた。

頼実力氏は1961年５月（昭和36）に校長を退職して，安古市町の教育長に就任した。1963年（昭和38）に「古市小学校」は「大須小学校」と合併して「新和小学校」となり1986年（昭和61）に再び「古市小学校」となる。1962年（昭和37）には「30周年記念大会」が開催され，参加校は73校，164

70）ひろしまバレーボール調査研究会「西山時義氏インタビュー調査資料」 1997

チームを数え，功労者に感謝状を贈るなどの記念行事が行われた。

1965年（昭和40）にこの大会は，1948年（昭和23）以来行ってきた中学校の高学年と低学年の区分をやめて，中学校は1本化し，小学校はA，B，Cの3クラスとし，この年から新和小学校も嚶鳴小学校以来の慣習となっていたハンディをやめて，新しい区分に従って相当学年に出場することとなった。それまではずっと1学年上のクラスに出場していたのだが，時代の変化とともに，新しい合理的な区分に従うことになったのである。

1973年（昭和48）に安古市町は広島市と合併し，同年の第39回大会の後は，新たに「広島市少年少女バレーボール祭」という名称で，秋の大会は「広島県少年少女学童大会」の名称で開催することとなり，1974年（昭和49）よりそれぞれ新しい第1回大会を開催することになった。しかし，1933年（昭和8）から今日に至る長い歴史の大会として，いつも最初からの通算回数を添えて数えており，例えば，1998年度（平成10）の春季大会は第25回（通算64回），秋季大会は同じく第25回（通算53回）として数えている。

1974年（昭和49）より1998年（平成10）までの記録を記載する。

広島市少年少女バレーボール祭

年度	回	春　季	秋　季	備　考
1974 (昭49)	1	(40) 31校　160チーム	(29) 34校　195チーム	「広島市少年少女バレーボール祭」と名称変更し再スタートする
1975 (昭50)	2	(41) 37校　163チーム	(30) 36校　194チーム	
1976 (昭51)	3	(42) 46校　209チーム	(31) 37校　193チーム	
1977 (昭52)	4	(43) 43校　186チーム	(32) 40校　236チーム	中筋小学校と分離する
1978 (昭53)	5	(44) 51校　234チーム	(33) 48校　272チーム	「松」「竹」「梅」のクラス分けを「A」「B」「C」と改称
1979 (昭54)	6	(45) 48校　262チーム	(34) 53校　323チーム	
1980 (昭55)	7	(46) 49校　253チーム	(35) 53校　270チーム	チーム数の関係で4年生の試合を前日の土曜日に行なうことにした
1981 (昭56)	8	(47) 51校　234チーム	(36) 55校　273チーム	

年度	回	春　季	秋　季	備　考
1982 (昭57)	9	(48) 56校　264チーム	(37) 58校　264チーム	50周年記念大会と銘打って開催，参加チームにペナントを贈る。記念碑がグラウンド内に建立された
1983 (昭58)	10	(49) 53校　245チーム	(38) 51校　268チーム	
1984 (昭59)	11	(50) 52校　259チーム	(39) 54校　295チーム	
1985 (昭60)	12	(51) 56校　281チーム	(40) 60校　290チーム	新和小学校男子チームが県代表で第５回全日本バレーボール小学生大会に出場し第３位となる
1986 (昭61)	13	(52) 57校　261チーム	(41) 56校　264チーム	住居表示変更により新和小学校を「古市小学校」と校名変更
1987 (昭62)	14	(53) 51校　212チーム	(42) 56校　236チーム	古市小学校男子チームが第７回全日本小学生バレーボール大会でベスト８入りをする
1988 (昭63)	15	(54) 61校　218チーム	(43) 58校　208チーム	古市小学校男子チームが第８回全日本小学生バレーボール大会でベスト８入りをする
1989 (平成元年)	16	(55) 57校　187チーム	(44) 60校　201チーム	古市小学校男子チームが第９回全日本小学生バレーボール大会でベスト16入りをする
1990 (平２)	17	(56) 60校　192チーム	(45) 59校　189チーム	
1991 (平３)	18	(57) 55校　174チーム	(46) 56校　175チーム	八木小学校男子チームが第11回全日本小学生大会で全国優勝をする
1992 (平４)	19	(58) 54校　166チーム	(47) 52校　150チーム	古市小学校女子チームが第12回全日本小学生大会で全国優勝をする
1993 (平５)	20	(59) 48校　133チーム	(48) 49校　127チーム	古市小学校男子チームが第13回全日本小学生大会で第３位となる
1994 (平６)	21	(60) 42校　106チーム	(49) 45校　112チーム	中筋小学校男子チームが第14回全日本小学生大会で全国優勝をする
1995 (平７)	22	(61) 44校　103チーム	(50) 43校　113チーム	中筋小学校女子チームが第15回全日本小学生大会で全国優勝をする
1996 (平８)	23	(62) 39校　96チーム	(51) 42校　106チーム	
1997 (平９)	24	(63) 39校　97チーム	(52) 38校　115チーム	中筋小学校男子チームが第17回全日本小学生大会で第３位となる
1998 (平10)	25	(64) 36校　102チーム	(53) 36校　100チーム	中筋小学校男子チームが第18回全日本小学生大会で第３位となる

1974年（昭和49）に，社会教育審議会は「在学青少年に対する社会教育の在り方――家庭教育，学校教育と社会教育との連携――」と題する建議

を行った。これは，青少年教育といえば，わが国では従来からとかく学校教育に期待をかけ，教育といえば学校が行うものとして，他の2者の教育はその陰に隠れてしまう傾向があったことを反省して，3者の教育が連携し協力していく必要性を説いたものである。その中で，家庭教育や社会教育は，家庭や地域の生活を通して，親子や人々との触れ合い，態度や習慣の形成，野外活動や社会参加の経験，自然，文化，芸術，スポーツ，ボランティアなどの幅ひろい実際的な経験を与え，それらによって，他では得がたい学習や諸能力を発達させ，社会性を伸し，充実した内容をもった人間形成を図る必要を強調した。

特に具体的な問題の一つとして，従来から学校の部活動や放課後の活動，あるいは夏季休暇中の林間学校や水泳指導などを，学校の教育活動として行うか，社会教育の活動として行うかについて，考えを整理していく必要があると指摘した。この問題は，保健体育審議会が1972年（昭和47）にすでに取り上げており，特に課外の体育活動については，学校は学校教育としてふさわしい範囲で，効率的に行うべきことを指摘していた。

1965年（昭和40）にパリで開かれたユネスコの成人教育の会議で，P. ラングラン（Paul Lengrand）によって「生涯教育」の方向が提示された。彼は，「スポーツは，一部選手に占有されてきたその枠を越えて，普遍的な文化として一般市民に普及してきている。今やスポーツ活動は一生のなかでほんの短期間においてのみ行われるものという考え方を捨てなければならない。スポーツを単なる筋肉運動ととらえたり，他の文化から独立させて捉えることは意味のないことであり，生涯教育全体のなかに統合しなければならない」と主張し，生涯スポーツの理念に基礎的な観点を与えている。P. ラングランの指摘するように，スポーツが単なる筋肉運動としてだけでなく，心身一如の存在としての人間，ホモ・ルーデンスとしての人間の創造，分有，享受行動および行動の諸結果との総合体である「文化」としてとらえられ，人生の長きにわたって生活の内容そのものに統合され，生活の質の充実に独自の位置を得るものとなるということが，生涯ス

ポーツの概念に基本的に内包されなければならないのである[71]。

わが国でも昭和40年代から急速に社会や生活に変化が生じ，生涯教育やスポーツ・レクリエーションなどの問題に関心が寄せられるようになり，家庭，学校，地域社会の連携協力とともに，その主たる分担領域についても議論されるようになってきたのである。

このような学校教育と社会教育の受持つべき活動範囲の分担と，その上に立って連携と協力を進めていくということは，理論上では明快で分かりやすいことであっても，現実の生活を踏まえた実践上では，とかく難しいことが多いものである。

しかし，長年の実践を通して地域の生活のなかに根付き，地域の人々から喜ばれ，地域の伝統的な行事にも位置づく状態になっていた安佐地区のバレーボール運動は，社会体育に衣替えをしたり，具体的な運営を変更しても，丁度これらの審議会の答申や建議を先取りする形で，ますます地域の誇りとして盛んになり，発展を続けている。

Ⅶ．世界NO１セッター猫田勝敏選手も安佐郡バレーボールから誕生

ここで，世界の名セッター，猫田勝敏選手について，書いておきたい。彼は，恐らく日本のバレーボール史にその名を長く残す人であると思われるが，安佐地区のバレーボール運動の視点からみれば，彼はその運動のなかから育った人として，地区の運動の成果を身をもって示した人であるとともに，また，地区のバレーボール運動を育てる上で，直接的にも間接的にも，大きく貢献した人として考えられるからである。

彼は古市で生まれ，1950年（昭和25）に古市小学校に入学し，いままで述べてきたような同校の雰囲気のなかで学校生活を過した。そして４年生になったときに，恒例の「少年少女バレーボール大会」に初出場している。

71）丹羽劭昭「スポーツと生活」朝倉書店　P 52-P 53

1956年（昭和31）地元の安佐中学校に入学した。その時の監督が現在，古市の浄宗寺の竹林住職である。「当時は嚶鳴小学校のコートで安佐教員団，安佐中学校もみな一緒に練習をしていた。あの当時は早く下校しなければいけないという校則で，授業が終わったら古市に来て暗くなるまで練習をしていた。頼実さんが校長なので許可してもらい，練習相手がいるし好都合であった。私は正式にバレーボールをしていないので，見て勉強したし，猫田君もそんな中で成長した[72]。」と，安佐地区の環境が猫田選手を育成したのだという。バレーボール部では，1年生から前衛センターとして，そのボールさばきは早くから定評があり，トスを上げるだけでなく，攻撃もこなした。昭和34年の卒業と同時にバレーボールの名門校になりつつあった崇徳高校に入学した。

崇徳高校は稲葉正文氏が監督で，1957年（昭和32）に全国大会で初優勝，国体で準優勝，1958年（昭和33）の全国大会で準優勝して脚光を浴びていた。稲葉氏は猫田選手を9人制のアタッカーとして使うか，セッターにしようかと随分迷ったが，結局，彼のパスの確実性，堅実な性格としての人間性などから前衛セッターとして3年間鍛えた。

稲葉正文氏は安佐郡沼田町伴の出身で，広島師範を卒業後，一時安小学校に勤務していた。専門は柔道であるが，安佐教員のバレーボールチームのメンバーとして練習，合宿と体育研修会でバレーボールの研究成果が認められ，崇徳高校の教員として要請を受け赴任した。そして1948年（昭和23）のバレーボール部創設以来チームを育てた。全国大会で優秀な成績を上げれたのも，バレーボールどころの安佐郡の出身者が多かったのと，中学，高校と一貫指導が出来たのが大きかった。彼の指導理論は，基本の重視であり，特に「レシーブあっての攻撃」が持論となって，攻撃偏重の練習をやめ，レシーブの基本練習に多くの時間を割いた。このあたりにも安佐バレーの特徴が，その根底に流れているのが読取れる。従って，長身選

72）ひろしまバレーボール調査研究会「竹林住職氏インタビュー調査資料」1995

手はいないが，巧くて，ずるい，バレーボールをよく知った選手が多数育っている[73]。

1962年（昭和37）に専売公社広島局に入社し，バレーボールも6人制を経験する。その時，選手兼コーチであった寺尾正三氏は「当時，体育館は少なく外のコートでバレーをする場合，いいセッターが必ずしもいいトスにならない。風を計算して，少し離して上げたがトスが風に流されてアタッカーの打ち易いポイントに行くトスを上げるセッターがいいセッターである。少なくとも本能で上げる。無意識に計算して出来る選手が巧い選手である。猫田選手にそれを感じた。体力テストしたら全日本の選手の中で一番鈍いとか，身体もそれほど柔軟でなかった。そのようなデータがあるのに何故，猫田選手が世界一のセッターとして認められたかというと，幼少の頃からボール遊びで猫ではないけれど，タマにして自分が扱っていた。だが最近の選手は力はあってもボールに扱われている。その差が猫田選手があそこまで大成した原因ではないかと思う。幼少時期のボール遊びの中で自然に身体が覚えた，そうしたプレーからバレーボールが発展すると思う。他の者が見たら，猫田選手が何でボールの落下点に行ってトスワークが出来るのかと疑問に思うかもしれないが，それは自然に生れたことで，決して敏捷性があったからというのではない。それは彼はスパイクをエースポジションで打っていたことが，スパイカーの気持ちが分かり，あれだけのトスが上げられ，彼のバレー技術を助けたのだと思う。だからスパイカーに合わせた打ち易いトスが頭から離れなかった。精神的には，一流選手になるには“練習の虫”になれ，率先して他の者を引っ張る意欲が必要であると説得した。暗くはなく，明るい性格なのに目立たない。派手なところがほとんどなかった[74]。」と話す。

坂上光男監督、長崎重芳コーチの全日本が東京オリンピック強化の一環として、広島でポーランド戦をする前の合宿に参加したのが，全日本への

73)　金桝晴海「広島スポーツ100年」中国新聞社　昭和54年9月（1979）P 245

74)　ひろしまバレーボール調査研究会「寺尾正三氏インタビュー調査資料」 1996

第一歩であった。

彼が全日本チーム入りした時，キャプテンである出町選手がセッターをやっていた。当時，世界でもソ連のモンゾロフスキーと比較さた名セッターである。この出町選手のようになろうと決心した彼は，練習の時でも出町選手の技術的，戦術的，精神的なすべてのセッターとして必要な要素を真似ようと努力した。練習以外でも日常生活の中，たとえば街を歩く時にも出町選手の歩いている後ろをいつも歩き，歩き方まで全部真似をした。その結果は，出町選手よりも数段うまくなり，1969年（昭44）には世界ベストセッター賞を獲得したが，その着眼は出町選手の一挙手一投足のまねが出発点であった[75]。

それから東京オリンピックの代表選手になるが，彼のセッター哲学は，「セッターのトスをスパイカーが打つ。これをベースにお互の癖を知り合ったらコンビは必ず成功する。そのセッターのトスを打てるタイミングでスパイカーが入るように練習すれば呼吸は合う。合わないときはセッターが一歩譲歩する。また，試合中に“誰が一番当っているか”を見極め，その時点で誰のどの手を使えば，より確実に得点出来るかを，常に冷静に判断する。トスは常に相手ブロッカーが2枚つけないように“正確さとスピード”を持つこと。相手ブロッカーを1.5枚にすればスパイカーは0.5枚のブロッカーにぶっつければ，そのトスは成功である[76]。」

東京オリンピックでは正セッター出町選手の影にかくれていたが，メキシコ，ミュンヘンオリンピックと，彼の名人芸は開花していく。だがミュンヘンオリンピックを目前にした練習中，右腕複雑骨折というアクシデントに見舞われたが，その間のあせりなど肉体的，精神的苦闘の数々を見ごと克服し，ミュンヘンオリンピックでは金メダルに輝き，世界一のセッターを不動のものとした。

75）松平康隆，豊田　博「バレーボール」講談社　昭和53年5月（1978）P23–P24

76）小泉志津男「猫田は生きている　第1部オリンピックへの挑戦」笠倉出版社　P79–P80

その後，全日本男子はメキシコ世界選手権で3位となり世界の王座から転落した。猫田選手は再び全日本にメダルをと4回連続出場を決意する。そしてモントリオールオリンピック開，閉会式の日本選手団の旗手に選ばれた。これは男子バレーボールが日本スポーツ界の中で確固たる地位を築いたことを物語る光栄なことであった。

しかし，世界のバレーボール界は，身長190 cmのセッターの登場により，トス・ワークだけでは勝負出来ない新しい時代になっていた。結果はメダルのない4位に終った。東京大会の銅，メキシコ大会の銀，ミュンヘン大会の金と栄光街道を歩んできた全日本男子の転落は，今後の厳しい試練の到来を予測するようであった。

モントリオールオリンピックが日本代表として最後と思っていた彼は，翌年の中村祐造全日本監督の要請を受け，再度，全日本選手兼コーチとしてカンバックした。1977年（昭和52）ワールドカップは2位であったが，1978年（昭和53）の世界選手権では11位と史上最低の成績に転落した。

1979年（昭和54）のアジア選手権で優勝すれば，モスクワオリンピックの出場が得られるが，ここでも韓国，中国に敗れ3位の成績で日本はオリンピック出場の目標を達成できなかった。ソフィアでの出場最終予選にも敗れ，オリンピック出場の夢は消えた。世界の頂点から屈辱の転落までを知り，最後までトスを上げ続けた猫田選手も17年間の代表選手にピリオドを打つ大会であった。

彼のバレーボールは，あくまで稲葉バレーを受継いだ「基本に忠実な“オーソドックス”なバレーボールである」。決して派手でなく，むしろ地味でドロくさい，安全を第一とするバレーボールであるが，面白味に欠ける欠点がある。堅実な守りがあって，それを如何に攻撃に直結させるか――それを考えるバレーボールにするのが，彼の理想とするものであった。セッターが目立つバレーボールを嫌った。逆に下積みに徹し，努力してアタッカーに合わせた自分を作り上げるのがセッターであるという信念を持ち続

けた[77,78]。

彼は選手を引退後は専売広島チームの稲葉正文総監督のもとで，監督修行のかたわら，セッター時代に“新人を育てる名人”と言われた力量を発揮し，後釜のセッター下村英士やエーススパイカーの原秀治，南正義，武田祐二など大型選手を育成し，日本代表として送っている。

「小さな大セッター」「コートの魔術師」「トスの名人」などと呼ばれた猫田勝敏選手も1983年（昭和58）9月4日，39歳で帰らぬ人となった。

彼の功績を記念して，JT（日本たばこ）は広島市南区皆実町2丁目に猫田記念体育館を1989年3月（平成元）に建設し，彼の遺品を陳列しているとともに，スポーツの殿堂として市民から親しまれて広く利用されている。

猫田勝敏　球歴

1963年（昭和38）	東京国際スポーツ大会	優勝
1964年（昭和39）	第18回東京オリンピック大会	3位
1965年（昭和40）	リガ国際招待大会	6位
	第1回ワールドカップ（ワルシャワ）	4位
1966年（昭和41）	イタリア国際招待大会（アキウラ）	優勝
	第6回世界選手権（プラハ）	5位
	第5回アジア大会（バンコク）	優勝
1967年（昭和42）	ルーマニア国際招待大会（クルージ）	4位
1968年（昭和43）	第19回メキシコオリンピック大会	2位
1969年（昭和44）	第2回ワールドカップ（東ベルリン）	2位
1970年（昭和45）	第8回NHK杯	優勝
	第7回世界選手権（ソフィア）	3位
	第6回アジア大会（バンコク）	優勝
1971年（昭和46）	ソウル国際招待大会	優勝
	オランダ国際大会（テイルブック）	優勝

77）小泉志津男「猫田は生きている　第2部バレーボールとの闘い」笠倉出版社 P108−P109

78）猫田禮子「父さん，お帰りなさい」日本文社出版　1984.4（昭和59）

	ミュンヘン国際スポーツ大会	2位
1972年（昭和47）	第10回 NHK 杯	優勝
	第20回ミュンヘンオリンピック大会	優勝
1973年（昭和48）	第11回 NHK 杯	優勝
	トーマス杯（コンスタンツア）	4位
	チェコスロバキア国際大会	5位
	国際トーナメント（リオ・デ・ジャネイロ）	2位
1974年（昭和49）	第12回ＮＨＫ杯	優勝
	世界男子選抜優勝大会（東京）	4位
	4ヶ国対抗（モスクワ）	優勝
	第7回アジア大会（テヘラン）	優勝
	第8回世界選手権（メキシコシティ）	3位
1975年（昭和50）	3国対抗（日本）	優勝
	第1回アジア選手権（メルボルン）	優勝
	リオ・デ・ジャネイロ国際大会	優勝
	ミナス国際大会（ベロホリゾンテ）	優勝
	サンパウロ国際大会	優勝
1976年（昭和51）	世界男子選抜リーグ（日本）	優勝
	第21回モントリオールオリンピック大会	4位
1977年（昭和52）	第15回 NHK 杯	優勝
	サビン記念国際大会（ミンスク）	4位
	第3回ワールドカップ（日本）	2位
1978年（昭和53）	北京国際友好招待大会	優勝
	サビン記念国際大会（ハリコフ）	7位
	第9回世界選手権（ローマ）	11位
	第8回アジア大会（バンコク）	2位
1979年（昭和54）	第16回 NHK 杯	優勝
	プレ・オリンピック大会（モスクワ）	7位
	デンエルト国際大会（ブエノスアイレス）	2位
	第2回アジア選手権（バーレン）	3位
1980年（昭和55）	モスクワオリンピック最終予選（ソフィア）	予選4位

1950年（昭和25）4月～1956年（昭和31）3月　古市小学校
（4年生より選手）
1956年（昭和31）4月～1959年（昭和34）3月　安佐中学校　選手
1959年（昭和34）4月～1962年（昭和37）3月　崇徳高校　選手
1962年（昭和37）4月～1980年（昭和55）1月　専売広島　選手
1980年（昭和55）2月～1983年（昭和58）9月　専売広島　監督

Ⅷ. 各指導者からみた安佐地区のバレーボール

スポーツが普及・発展するためには指導者が必須条件であるといわれるが，安佐のバレーボール運動においても各学校に研究熱心で，情熱的な指導をした人達が多数存在したのは事実である。それらの指導者がバレーボールの好きな子供たちをどのように指導し，優秀な選手へと導いたのか，また，それらの子供をどのようにまとめて強力なチームを作ったのか興味深いところである。全国的レベルのチームを作った高校，中学校，小学校，実業団の指導者に話を聞いた。

多くの指導者は異口同音に，「安佐地区出身の子供たちは他地区の子供たちと比較して，体力的にも技術的にも大差はない。しかし，チームの中に3～4人安佐地区の子供がいるとバレーボールが全然違ってくる」というのは高校女子監督に多い。

1958年（昭和33）から1983年（昭和58）まで25年間，安田女子高校監督として全国大会に多数出場，ベスト8まで進出する活躍をし，現在，大野石油バレーボール部総監督の石井辰郎氏は，「安田女子高校時代は，チームの中に3～4人は安佐地区出身者がいた。最初一人づつでプレーさせてみると格好よくない，上手ではないと感じていた。しかし，これが2人，3人になってやると全然違う。ボールも見えるが周囲も見える。周辺視野が広い。例えば，レシーブ練習をするとき，相手からくるボールを，レシーブする選手，その後ろの選手はちゃんとカバーに入っている。それが非常に的確なところに入る。これは古市小学校出身の子供をみていると，いろ

んなボール遊びをする。その中でボールを扱うことを自然の遊びの中で覚えたのではないか。ボール遊びをお互がやった中で，球技の本当のチームプレーを自分で体験している。しかも，それが教え込まれたものでなく，自分の能力の範囲内でやり，無理して教え込まれていないところが素晴らしい[79]。」

最近，県内は勿論，全国的にも上位に位置する，広島市立沼田高校の横田宗男氏は，「安佐出身の選手は基本の一つ一つのプレーよりも，動きの中での読み，判断力など総合したものが傑出している。そして，次に自分が何をしなければならないのかという判断力が自然に身に泌みついている。スポーツは頭で理解できていても，体が何をするか理解し，瞬間的に行動を起こすことが大切。例えば，優秀な選手はカバーリングの時に，常に良い態勢でつないでいける。早い動作や瞬間的な動作を起こすような状態になった時にボールから眼が離れていない。キャリアのない選手は，単発では出来るのだが，いろんな流れの中で対応出来ないことが多い。安佐の選手は前者の場合が多く，チームの中に入ると実力以上のものを発揮する[80]。」

現在，安田女子高校監督の渡辺博美氏は，「安佐地区出身の子供はバレーボールをよく知っている。だからチームの 6 人の中に入れて動かすとスッスッと動ける子供が多い。コートの中で“こっちに動け”と指示しなくても“ここはこう動かなければいけないんだ”ということを理解して動きの出来る子供が多い[81]。」

高校男子の監督は，「バレーボールに対する取り組み方」，「勝負に対する執念」が他地域の子供たちと違うと，精神面を強調する。

全国大会優勝はコーチ時代に 5 回，監督になってから10回経験している崇徳高校の吉川渉氏は，「崇徳高校のバレーボールの OB が350人位で，そのうち安佐出身者が約 6 割いた。全体的に安佐郡出身者の選手が多いとき

79)　ひろしまバレーボール調査研究会「石井辰郎氏インタビュー調査資料」 1996
80)　同「横田宗男氏インタビュー調査資料」 1997
81)　同「渡辺博美氏インタビュー調査資料」 1997

に優勝や強力なチームが出来ている。特に，セッターでチームの軸になる子供がいたときは強いチームになっていた。その子供らはセッターに必要な器用さを持っている。結局，小さいときからボールを扱っていたからで，バレーボールを良く知っている。それとバレーボールに対する意欲というか，すでに小さい時から鍛練されており，精神面が特に優れている。選抜優勝大会4回，インターハイ5回，国体1回優勝で，その時のメンバーを見ると，レギュラー6人のうち4人位は安佐郡の出身選手であった[82]。」さすが高校男子バレーボール界で西の横綱と言われているだけあって全日本代表も青山信夫，山崎和仁，ユニバーシアード代表も西村栄蔵，積山和明，小田雅志。実業団，大学の監督も西本哲雄(元JT広島，全日本女子ジュニア)，寺廻太（元NEC，全日本男子)，米田一典(日立，元全日本女子)，野村健二（元日本鋼管)，小早川啓（元日本鋼管)，志水裕（元鐘紡女子)，積山和明（東海大学)，佐幸法昭（東亜大学）と数多い。

ここ数年，全国大会出場の機会が多く，1998年度（平成10）春の高校選抜優勝大会でベスト8，インターハイで3位の成績を上げた，神辺旭高校監督の藤井修氏は，「神辺旭高校が県大会で優勝し，全国大会に出場した年は，安佐地区の子供が来てくれた時である。春の選抜には7回出場しているが，全部安佐の子供が入っている。安佐の子供のように小学校からバレーボールをしてきた子供は，巧みさとキャリアの面で差が出てくる。試合運び，とくにゲームで大事な時に小さなミスやプレー，考え方に現われてくる。従って，試合で一点を競っている時にその能力が発揮される。あの地区にはバレー熱というか，地域の人々，親，子供たちがそのような意識にたって，勝つんだという勝負に対する執念のようなものが，全国の他地域にない特別なものを感じる。全国でも“広島バレー”と言われるが，それは安佐郡のバレーボールのことである[83]。」

全国大会にも度々出場している広島工大高校監督の川本好明氏は，「小さ

82）ひろしまバレーボール調査研究会「吉川渉氏インタビュー調査資料」1997
83）同「藤井修氏インタビュー調査資料」1997

い時からボールに慣れているので，基本的技術も基礎が出来ているが，やはりバレーボールに対する取り組み方や，バレーボールのコスさが安佐地区出身の選手にはあると感じられる。俗にいう勝ち方を知っているこどもが多い[84]。」

中学校の指導者はどのように見ているのであろうか。

能美中学校でバレーボールを指導していたが，後に祇園東中学校に転勤し，全国大会3回出場し，2位の成績を残すなど，優秀なチーム，選手を育成し，現在，安西中学校の校長，鷲見晴久氏は，「バレーボールの基本技術はそれぞれ指導者の鍛え方によって違いがあるが，バレーボールをよく知っているというか，その子供たちが核になってチームをうまく回転させる。そういったものがこの地域の強さであろう。中学校からバレーボールを始める子供は少ない。親がバレーをしていた影響で始めた子供が多い。そうした子供たちを指導できたし，そこで基本さえしっかり付けておけば，自然とビックリするようなプレーを子供たちが，教える教えないに拘われず出来るようになる[85]。」

高宮中学校を振出に，祇園中学校，祇園東中学校，伴中学校，安佐中学校(教頭)，伴中学校（校長）と転勤先の学校のバレー部を強くし，優秀な選手を育成した山辺俊治氏は，「昭和31年に安佐教員チームに入って練習したり，試合に出場していた。学校対抗の教員バレーボール大会があり，小学校，中学校，可部教育事務所単位でチームを作り，古市小学校のコートで土曜日の午後試合をしていた。安佐郡は小規模の学校が多いため，学内の教職員が総出でないとチームが成立しない学校がほとんどであった。従って，安佐郡の教職員はバレーボールが自分でプレー出来，指導できることが条件のようでもあった。今日のようなギスギスした関係はなく，皆が仲良く行事に参加していたと思う。それと小学校から入学してくる子供たちは，基本的なパス，サーブなどはかなり出来ており，中学校で指導するのにも楽だった。“ワン・ツー・ショイ”のボール遊びにより，“カン”やその他の能力を身に付けていたのが大き

84)　ひろしまバレーボール調査研究会「川本好明氏インタビュー調査資料」 1997
85)　同「鷲見晴久氏インタビュー調査資料」 1997

かったのではないか[86]。」

本人も八木の出身で小学校時代からバレーボールに親しみ，崇徳高校，日本体育大学と選手を続けてきて，安西中学校から現在，高取中学校監督になっている絹谷徹氏は，「バレーボールの技術は専門的に見ても入学してきた時は，他地区の子供と変らないと思う。しかし，勝つんだ，自分は巧くなり，いい選手になるんだという気持ちは全く違う[87]。」

祇園東中学校で全国大会2回出場で3位，「さわやか杯」監督2回。現在，口田中学校監督の新川恵美氏は，「太田川を境に感じたことは，安佐地区の子供たちは，授業で教えていても，ボール遊びが出来るということである。ところがこの地域の子供はドッジボールでボールキャッチするのに，手を前方に出したままで捕球しようとするからボールをはじいてしまう。普通，手を出してボールが手に当る瞬間に手を自分の方に引いてキャッチする。それが出来ない。体育の授業の指導案を作成することも違う。キャッチボールから入って打込みをするが，この地域の子供はキャッチボールをまず教えないといけない。手首を使用してバウンドさせることが出来ない。片手でボールを持って下に打ちつけることなど出来ない。ボールに慣れたり，ボール遊びをすることが全然違うと感じる[88]。」

安佐中学校，安佐南中学校，城南中学校とバレーどころの学校を転勤し，現在，広島県中学校体育連盟理事長の中野正己氏は，「今の子供はバレーボールをしながらサッカーやバスケットボールもするという多岐に渡るのが多いが，この地域の子供はバレーボール一筋である。その意識が他県や他地域の子供と違う。要するに，バレーボールは学校だけで行い，家に帰ればバレーボールから離れるのでなく，家に帰ってもバレーボールをする。“地域とバレーボール”が密着していて，必然的に意識の中でもバレーボールが生活の中の一部分になっているため，指導者が構えてバレーボールは

86) ひろしまバレーボール調査研究会「山辺俊治氏インタビュー調査資料」 1997
87) 同「絹谷徹氏インタビュー調査資料」 1997
88) 同「新川恵美氏インタビュー調査資料」 1997

こうだと言わなくても，自然に体で生活の中で覚えてきているところはあると思う。それから，小学校の時に，基本的技術を教えられているだけでなく，競技としてのバレーボールをしっかり教育されている部分がある。従って，子供たちが中学校に入ってきても，バレーボール試合はこうだと指導しなくても理解できている。例えば，サーブを打つ場合，こちらの方向に向いて打てばボールは，どこに飛んでいくかが理解できている。だから，他所の指導者が即に1年生に入った段階で，既に2年分くらい違うと言われるが，教えても教えられない部分がある。バレーボールの技術以外に試合に対する自分のコンディション作りや，大会に出場した場合の習慣付けなどの差が歴然とでている[89]。」

古市小学校教員の時から頼実力氏とバレーボールを通して親交のあった西山樹元古市小学校校長は，「小学校のバレーボールが6人制になり，スポーツ少年団の人数が減少している。少年少女バレーボール祭は頼実先生の意志を継いでいるので，9人制という伝統の灯を絶対に消してはならないと思う。大会運営もチーム数を少なくしたグループを多く作り，優勝の感激を多くの子供たちに経験させ，子供の将来に役立つようにしてやりたい。そうすることでバレーボール人口を増加することにもなる。

それと古市小学校に赴任してきた教員は，バレーボールの経験の有無に関係なく，自分で技術ができ，指導の方法を知り，また，どこが難しいかを理解していなければ，よい指導は出来ない。自分でやってみてバレーボールの素晴らしさ，難しさを知りながら，子供に接することが，この地区の小学校の教員には必要である。書道，図画，作文，スポーツなど幅広い教育の中で，子供たちの能力を伸ばすような教育，環境作りを目標にしている。それが教育の活性化への道である[90]。」と語る。

古市小学校で教鞭をとるかたわら，古市スポーツ少年団女子チームの監督でもある宮原正則氏は，「バレーボールの指導は6名の教員と地域の指導

89)　ひろしまバレーボール調査研究会「中野正己氏インタビュー調査資料」 1997
90)　同「西山樹氏インタビュー調査資料」 1996

者の方々とで担当している。少年団は数年前までは4年生から募集していたが，児童数減，他種目志向，塾その他習事などで，現在は3年生から募集開始している。やはり，バレーボールをやろうという子供が少なくなったのは事実である。

子供たちにはスポーツをしていない者より時間が束縛されるので，時間を大切に使うよう指導している。しかし，決められた時間内で必要な日常生活をしなければならないので，他の子供に比較すると随分大変だと思う。全国大会出場ともなれば，午後8時頃まで練習するし，時間を有効に使わないと疲労も残るし，勉強とスポーツの両立は不可能になる[91]。」

運送会社を経営するかたわら古市スポーツ少年団男子チームを，1980年（昭和55）よりコーチしている森本忠司氏は，「現在は体育の授業の中でバレーボールを指導しない。従って以前のように子供がバレーボールをして遊ばない。バレーボールをする場はスポーツ少年団という組織の中だけである。学内でもチームを応援したり，激励する雰囲気はなく，古市チームが全国大会で決勝に進出し，テレビ放映があっても，見る子供はそれに関係している者だけで，偶然に見た者以外，無関心派が多いような気がする。

少年団の子供の中で親がもとバレーボールをした経験があるのは，女子10名中2名，男子16名中2名のみである。ただ，保護者の理解度は大きく，普段の練習でもボール拾いをしたり，チームの世話をよくしてもらう。

われわれが子供たちに教えて出来る技術は限度があり少ない。教えて出来るまでには，それだけのものをこの地区の子供は持っている。だから基本的なことから外れることに気を配るだけである[92]。」

現在は全国大会で上位に食い込もうとすると，毎日の練習はもちろん，県外遠征をして練習試合を多くし，全国の強力なチームをすべて把握していないと優勝できない時代になっているという。

最後に実業団の監督経験者に感想を聞いてみよう。戦後，嚶鳴クラブの

91）ひろしまバレーボール調査研究会「宮原正則氏インタビュー調査資料」1997
92）同「森本忠司氏インタビュー調査資料」1996

全盛期に試合をした時の記憶を小泉忠直氏は，「嚶鳴小学校のグラウンドで試合をしたときに，小，中学生が観衆として見ていたが，子供たちの眼の色が違うと感じた。そこで彼らに質問をしてみた。どの時点でのどのプレーをみているのか？すると9人の選手がどのようなポジションで，どう動いているか，その時にどこにトスを上げたか。レシーブはどの位置に守っているのかなどを見ていると答えた。要するに，バレーボールがチームプレーだということを頭から答える。嚶鳴クラブにはスタープレーヤーがいないので，エースのスパイクには興味がなく，9人のコンビネーションのことについて話す。それで嚶鳴という所は，子供でもゲームを観る着眼点が違い，凄い所だなと思った[93]。」という。

寺尾正三氏は専売広島時代に猛練習の監督として有名であったが，「専売の選手に9mのパスを1時間連続して練習したことがある。その時，猫田選手はネット際で行う。これは一番難しく，他の選手が嫌がる。若い選手はコートの後方で多少球道が乱れても，何とか誤魔化して行う。それを最初から最後まで正確に出来たのが猫田選手であった。“パスを制する者はバレーを制する”という格言があるが，安佐地区出身の選手はこのことを理解している者が多かった[94]。」

砂田祥次氏はマツダの9人制選手にも，安佐郡で行われていた“ワン・ツー・ショイ”のミニバレーを，3m四方のコートを使用して，前衛，中衛の選手に経験させているという。

「するとボール捌きが良くなり，トス，ネット際のプレーが非常に巧くなる。安佐出身の巧いセッターたちはこうした遊びの中で養われた。とくにセッターは，味方に打ち易いトスを上げるだけでなく，相手の選手，ブロッカー，レシーバーも見えて，現在どのポジションの，どの位置にいるかが把握できることが必要になる。昔から“後ろにも眼がついているくらいになれ”と言われたが，そうでないといいセッターにはなれない。それはこ

93)　ひろしまバレーボール調査研究会「小泉忠直氏インタビュー調査資料」 1996
94)　同「寺尾正三氏インタビュー調査資料」 1996

うした遊びから獲得するものが大きい。現在の9人制は，4・3・2システムなので，オープンに高いトスを上げて攻撃する戦法では全部ブロックにかかる。相手を如何に誤魔化すかということをしないと通用しない。そういう意味でも指導者として昔の遊びが生きている[95]。」

Ⅸ．おわりに

昭和の初期に地域の子供たちの放課後の生活指導という形で導入され，古市小学校からスタートしたバレーボールの輪は，安佐地区全体に普及・振興し，青少年の健全育成に貢献し，地域全体の活性化，団結化を促し，地域の人々の楽しみであると同時に，誇りでもあるような地域の生活文化として発展した。

特定のスポーツがとりわけ盛んな地方や町がある。われわれの調査でも，静岡県藤枝市，山梨県韮崎市，愛媛県南宇和市，長崎県国見市などのサッカー，藤沢市のバレーボール，秋田県能代市のバスケットボール，島根県横田町のグランドホッケーなどがある。しかし，安佐地区のバレーボールほどにこの地方の風土をにじませ，人々の気風をも反映した伝統的なスポーツは全国的にみてもそれほど多くはない。

そのように普及・発展した要因は多岐にわたるが，中でも環境と指導者という2つの要因の重要性については，本研究の多くの聞取り調査でも語られていることである。

環境については，小学校の子供たちが，学校に行けば常時ネットが張ってあり，ボールがあり，そうしたコートの中で足で小さなコートを書き，ネットを挟んで，1対1，2対2，3対3のミニゲームをして遊ぶ。授業間休憩，昼休憩，放課後には学校の児童・生徒全員がボール遊びに熱中する。自宅に帰れば，ボール1つあれば路地に竹竿を渡してネット代りにしてボール遊びに興じていたという。常に遊びのなかに，バレーボールが存

95）ひろしまバレーボール調査研究会「砂田祥次氏インタビュー調査資料」1996

在し，生活の一部分になっていた。そうした遊びの中から，バレーボールの面白さとか，技術的なもの，魅力的なものに取りつかれて，それがいつまでもバレーボールを継続して楽しむ動機づけになっている。そうした環境が一つの土壌になり，自分の子供にも，そして次の代まで継承されて現在まできて，伝統の系譜をつづっているのではないだろうか。

指導者については，頼実　力氏という素晴らしい先覚者を初め多くの熱心な先生方がいた。そうした指導者が情熱をもって子供たちにバレーボールの楽しさを指導し，体育研究会では他校の先生方にもバレーボールを指導したり，一緒に研究し，また，安佐教員団チームを結成して自分たちの技術面，指導面の向上に献身した。そうした中で各学校が授業の中にも，放課後のクラブ活動でも取り入れていき，毎年実施される少年少女バレーボール大会に参加する機運も子供たちに倍増していったと思われる。さらに，1948年（昭和23），1949年（昭和24）と全日本選手権大会，国民体育大会に4連勝を成し遂げた「嚶鳴クラブ」の活躍も，安佐地区の人々には誇りであり，憧れの存在であった。平均身長も低く，スター選手も不在であった田舎の青年団チームが全国優勝出来た原因は，指導者と選手が一体となって勝因の研究と実践に努力した結果，古市独得のバレーボールを生みだしたことである。

確かに，スポーツが普及・発展する課程では，そうした環境，指導者が大きな柱となり，スポーツを振興する一つの原動力になっていることは事実である。それらの伝統は安佐地域のあちこちで，脈々と受継がれている。

近年では小学校，中学校の全国大会での安佐地区の活躍が目立っている。1985年（昭和60）の第5回全日本バレーボール小学生大会（ライオンカップ）で古市小学校男子チームが3位になって以来，1991年（平成3）には同大会で八木小学校男子チームが初優勝，1992年（平成4）には古市小学校女子チームが優勝，翌年，古市小学校男子チームが3位，1994年（平成6）には中筋小学校男子チームが優勝，1995年（平成7）には中筋女子チームが優勝，1997年（平成9），1998年（平成10）には中筋小学校男子が

3位とバレーボールのメッカである安佐地区の名声をさらに全国に高めた。

一方，中学校の全国選抜大会「さわやか杯」でも，安佐南選抜男子チームが，1987年（昭和62）の第1回大会で優勝したのに続いて，1994年（平成6）の第8回大会，1995年（平成7）の第9回大会と3回も優勝という快挙を成し遂げている。

これらの快挙は，当然，地域の伝統を盛り立て，それによって地域の子供たちの意識を高揚することに役立っている。

昭和初期から古市を中心として普及・発展してきた安佐地区のバレーボール運動は，迂余曲折を重ね，70年の長き年月を経て今日に及んでいる。創始者の頼実　力氏の「バレーボールによりスポーツに親しむ人の底辺を広げ，多くの児童・生徒たちに明るい社会づくりの一員になって欲しい」という教育的目標を真剣に受継いできた教師や卒業生たち，あるいは地域住民の努力が，その目標を開花させている。今後，この伝統は多くの人々によってますます大きな果実となって受継がれるであろう。

なお，古市の地にひいては安佐の地に栄光と活力を生み出した頼実力氏，嚶鳴クラブ，猫田選手の教育的意義を末長く伝えることを訴えて，「伝統顕彰事業」として，浮き彫り像（リリーフ）と功績や大会の歴史を刻した盤を「伝統顕彰の庭」に設置した。これは国土と国柄を愛する気持ちの源泉となる郷土愛を，児童・生徒の心に育てる教育上欠かすことのできない要素であることも，本事業遂行の大きな役割である。

最後にこの研究は多くの人々から，その人の体験や，さまざまな時期の状況，関連する情報などについて話を聞くことにより，資料を収集することができた。多くの貴重な情報や資料を提供していただいた方々に心よりお礼を申し上げたい。なお，本研究は1995年度より1997年度までの3年間にわたる広島修道大学総合研究所の共同研究の一環として実施した研究である。

Summary

Research on the Volleyball Movement and its Educational Effects in Asa-minami District of Hiroshima City. (2)

——Analysis of educational and social factors that related to the movement since After War Period to the present. ——

Hiroshi Sasaki (Professor of Hiroshima Shudo University)
Koujirou Kishimoto (Former Professor of Hiroshima Shudo University)
Tsuyoshi Uno (Former Professor of Hiroshima Shudo University)
Sadamitsu Arai (Professor of Hiroshima Municipal University)

In this article, we traced and analysed the development of the Volleyball Movement in Asa District since 1945 to date. Many important events have happened during these long years, which added new experiences and power to the movement, thus fostering the tradition of the district.

School Volleyball Meet was re-opened in 1946 when the life and social conditions were very severe, but it was really one of the few enjoyment that can give sound delight to children. Just then two things gave impetus to the movement. One was that Mr. T. Yorizane, who started this movement, bacame the principal of Omei Elementary School.

But the other was really very surprising news not only to people of this district but also perhaps to people throughout Japan. The news was that Omei Club, the local volleyball team here, won the championship in All Japan Volleyball Meet and National Athletic Meet in 1948 and 1949.

The members of this team were the youths who finished Omei elementary School, and worked in the neighborhood. They practiced training in the evening after their daily work. It was really very surprising and unblievable

that such local youth team won against strong university teams. Later, some of the members became the players of All Japan Team, and contributed to make up a technique of Jananese combination volleyball.

This event gave, perhaps, much influence and impetus to the volleyball of this district. Beside the School Volleyball Meet, which became more prosperous year by year, there arose the new volleyball of adult people, through which the new words 'Asa Volleyball, or 'Kabe-Line Volleyball' were coined and popularly used. Kabe-Line is a name of the railway running through Asa district.

The topical events of this fields are (1) the Inter-Municiparities Volleyball Meet, started oin 1954 by the sponsorship of Gion Town, and (2) the PTA Volleyball Meet, started in 1960 by the sponsorship Sato Town. The former was very peculiar in that such big prefecture-wide event was spnsored by a small town. It continued for 20 years till 1973, when this town was merged into Hiroshima City.

The latter meet continues to date because of its local character, but it is significant not only in that it gave the model to the Mamasan Volleyball, now very popular throughout Japan, but also in that it has a peculiar rule providing that a team must be organised by 3 men and 6 women. The aim of this rule is to invite as many parents, both fathers and mothers, as possible in mixed teams, and to promote and foster friendship and cooperation through games.

Meanwhile, the School Volleyball Meet continued to flourish with ever increasing numbers of schools and pupils participating in the program. Since 1974, the name of the meet was changed to 'Volleyball Festival for Boys and Girls in Hidoshima City,' because the suburban towns were merged into Hiroshima City in 1973. But a big change was that this program began to be held as a Social Athletic Meet.

Social life was rapidly changing and the movement towaed life-long learning

was making progress year by year. In 1973, the National Council for Social Education presented the report on the 'Social Education for School Students,' in which it stressed the importance of cooperation between School and Social Education programs, suggesting that some of the programs for after school activities can be more effectively operated in the social education programs.

Thus, here in Asa District, Volleyball Festival was started in the form of social education activity a little earlier than that report, which was made possible through the long history cooperation between schools and people.

In recent years school teams of Asa District that took part in the All Japan Elementary School Volleyball Meet in Tokyo always showed the good records and won higher prizes or sometimes championship. These games are operated with six members in one team. So it is different from the form of Volleyball Festival, which is still now operated with 9 members in one team.

The aim of this 9 member rule is to invite as many pupils as possible to join the program, and to give them sound delight through experience of out door games with the coperation and friendship among the participants. This is surely the Spirit of Asa Volleyball Movement, and people in this district have high regard for it as a traditional and valuable culture of their distrct, which should be maintained and succeeded to the later generations for long future.

We added some description of Mr. K. Nekota, who studied in Furuichi Elementary School, and who became the world famous best player of volleyball. The memorial gymnasium is now in Hiroshima.